

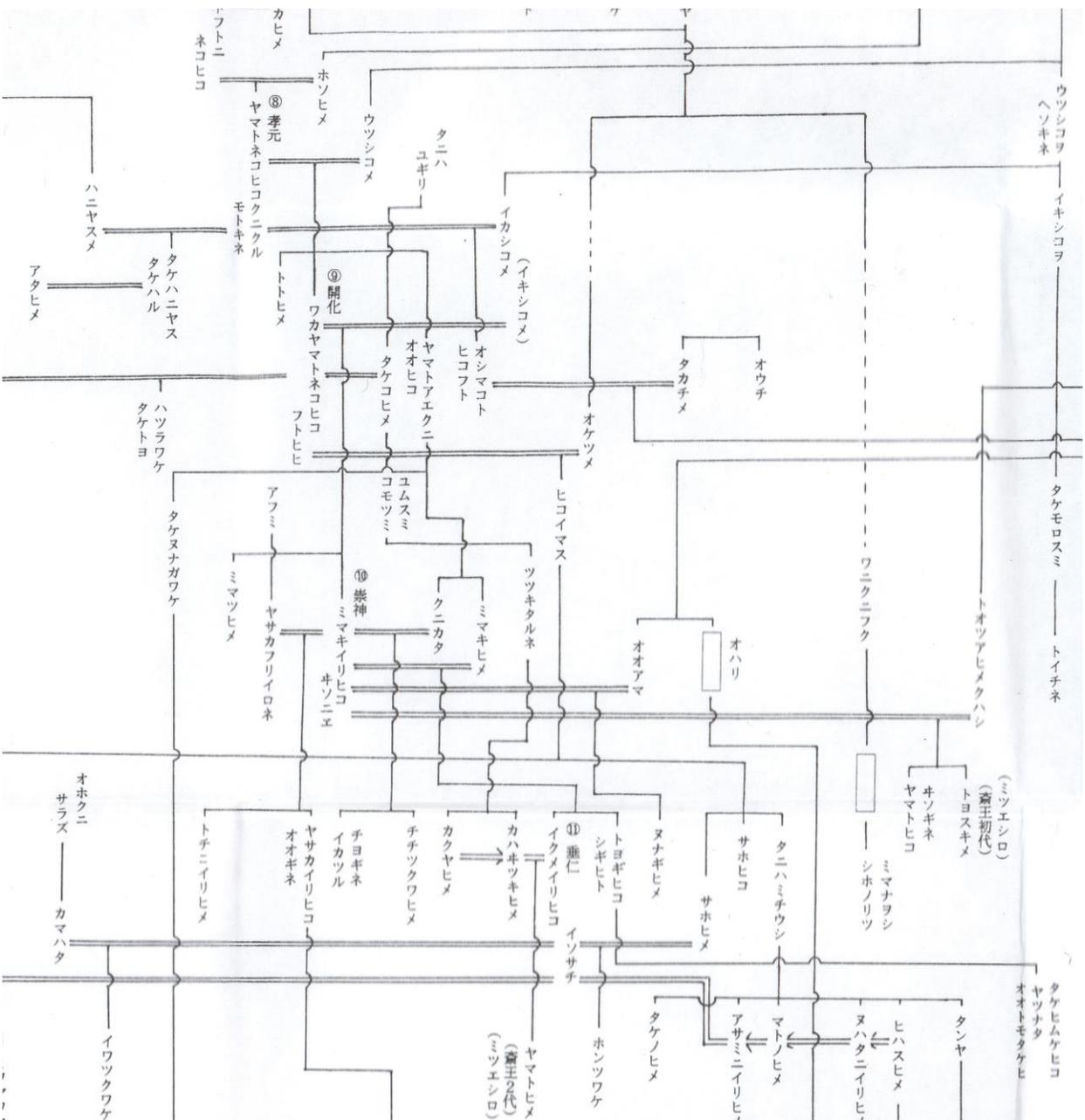
カミヨの「タス」の言葉の意味と、10代ミマキのキミ(崇神天皇)の時代の「オサム」の言葉の違い。

「崇め」の時代に入ってきたのでした。考古学での古墳時代です。

不思議の事が蔓延する時代です。恐怖に駆られる時代です。

カミヨは、理性が凌駕する時代です。指導者階級は、そうでした。

食糧や物資にゆとりが出来て来て、人口も増え、疫病のパンデミックの起きた時代です。叛乱も起きます。



## 34アヤ、ミマキのヨミマナのアヤ

(10代崇神天皇の後半)

10代ミマキのキミの、ミツカキ(桜井市金屋)のミヤコの、10年(アスス630年)ナカツキ(9月)17日、「34-1」コシ(越中・越後・越前)のラシ(勅任執政官)に任命されたオオヒコが、一旦帰京しました。ヨミチノイクサのひよです。

それは、ナラサカ(奈良市の北部・奈良坂)で、不思議なオトメ(少女)からウタを聞かされたからでした。反乱を告げるウタでした。ウタを告げたあと、オトメは消え失せたのです。不思議です。

オオヒコは、ミマキイリヒコ(崇神天皇)さんに申し上げます。

『わたくしは、ヤマシロへと道を進めています。ナラサカに至りました。すると、オトメがウタを歌って聞かせるのでした。』

「みよみまき いりひこあわや

おのがそゑ ぬすみしせんと

しりつとお を いゆきたがひぬ

まえつとよ いゆきたがひて

うかがわく しらしとみまき

いりひこあわや

「ここに、胸騒ぎを覚えまして、一旦戻りました次第で御座います』

ミマキイリヒコは、このウタは、何かの知らせだとお感じになりました。モモソヒメは生まれつき聡(む)くつ、このウタは、34-4「34-4」と聞くものがありました。モモソヒメは、キミに申し上げます。(モモソヒメはクシヒコの12代あとの子孫です)

「これは、シルシです。タケハニヤスが叛(そむ)いて反乱を起こそうとしているのでしよう。」

わたくしは、聞きましたのでした。タケハニヤスの妻のアタヒメがカクヤマのハニ(埴土)を取って来て、ヒシ(甲冑)のような防御服か?)に入れていました。そして、祈って言うのだそうです。「これを、クニのモノサネ(タケヒトヤマトウチ、29・35)」と。

これにおいて、証拠が揃ったのではないでしようか? (叛乱です) 急いで、対処方法をお考え下さいませ』

この、モモソヒメの話を、諸臣達もあわせて討議をしているうちに、すでに、タケハニヤスとアタヒメはイクサ(戦闘)を開始し始めていました。(タケハニヤスは、8代クニタル(孝元天皇)のミコ。タケハニヤスとオオヒコとは義理の兄弟)

二手に分かれて、タケハニヤスはヤマシロを襲います。妻のアタヒメはオオサカ【二上山のところか? オオサカヤマのイシハ】34-18【を襲います。】

そこで、ミマキイリヒコは、34-18「34-18」を発して、イサセリのミコを、オオサカへの

平定に向かわせます。ここに、迎えた戦闘で、イサセリヒは、アタヒメを打ち破って殺して収まりました。

タケハニヤスのヤマシロ方面には、オオヒコと、ヒコクニフクを向かわせました。ヒコクニフクはヤマシロのワニタケスキにインハ【詳細は未詳】を据えます。ツハモノを率いてイクサタテをして、キカヤ（樹木か?）を踏みむけて戦闘が始まりました。テガシワ（取っ掛かりの意か?）の戦闘を、ヒコクニフクが勝利しました、ナラサカでした。

オオヒコは、シモミチにてワカフアクラ【詳細は未詳】と、相挑むのでした。ハニヤスヒコは、川（木津川）の北岸に、此のオオヒコの挑みを見まして、言うのでした。

『ナンチ（汝）は、何故に拒むのであるか?』

ヒコクニフクは、答えて言います。

『これナンチ（汝）よ、アメ（天皇陛下）にサカフ（逆らう）のを、討たしめられたるのです。（あなたは、朝敵になってしまっているのです）』

ここに、戦闘の火蓋がひらきます。タケハニヤスの射る矢は当たらず、ヒコクニフクの射る矢は当たるのでした。そして、タケハニヤスは胸に当たった矢で、亡くなるのでした。タケハニヤスの亡くなったのあと、残軍は散り散りになります。さらに、追討を続けましたら、「ワキミ」「ワキミ」と流れて逃げ去りました。ここにイクサを収めて、全ての平定軍は帰朝するのでした。

メツキ（10月）ハツヒ（1日）に、ミナトノコが出されました。

『ウチ（畿内）はムケシト（平定できた）、トシ（遠国）はまだまだアルル（荒れ果てていぬ）。

ヨミチ（四方面）のイクサ（戦闘準備をした勅任執政官）タツ（出発する）べし』  
と。そこで、スエフカ（22日）に、改めてヨミチのラシマト（教える使者）が出発しました。

<sup>34-14</sup> モモンヒメは、オオモノヌシのシマ（妻）となりました。不思議なことです。オオモノヌシは、ヨ（夜）に来るのです。しかし、ル（風）には来た事も見たこともないのでした。そこで、モモンヒメは、願いを言うのでした。

『ヨが明けてから、キミの姿を見たいものです』

と、帰るのを止めるのでした。オオモノヌシのカミは、告げて言います。

『それは、イチシルシ（尤も当然なこと）ことです。

では、明日の朝に、わたくしはクシケ（櫛入れ箱）に入っておきます。

でも、わたくしの姿を見て決して驚かないで下さい』

と、言うのです。モモンヒメは不思議な思いを抱くのでした。

さて、明るる朝、クシケ（櫛入れ箱）を見ますと、コハヒ（小蛇）が居るのでした。モモンヒメは、驚いて叫び泣きます。すると、オオモノヌシのカミは、ハチ（恥じ）てヒトになり、言うのでした。

『ナンチ（汝）忍びずにして、これは、わがハチ（恥じ）です』

と、大空を踏み上って行くのでした。そして、ミモロのヤママ（三輪山）に入っつてゆきました。

モモンヒメは、ミモロヤマを仰ぎ、そしてハチ（恥じ）るのでした。時にツキ（月経）が来て、ハシ（箸）でミホト（陰部）を突いて、トクなくなってしまつのでした。そこで、三輪山を望むオイチにハシツカのみ墓が作られるのでした。風にはトの手により作られます。

夜にはカミ(オオモノヌシ)がオオサカヤマ(二上山か?)の石を運びます。モロ(人々やカミ)が相次ぎて、タコシカテ【詳細は未詳】によって、ハカの成るウタ。

おほさかも ツキの力おそゑ

いしむらお タコシにこゑは

こしかてんかも

<sup>34-19</sup> 11年(アスス631年)のウツキ(4月)16日に、ヨミチ(四道)のイクサが全て、目的を達して、全国に平安が訪れたことの報告がありました。

アキ(秋)になって、早くに「く」なってしまうた人を、ア(アモト)に還す為の「ヲを解く祭り」をすることになります。オオタタネコ(22歳)を祭主に決められて、ハシツカ(箸塚)にて祭りがおこなわれますと、カカヤク(輝く)ノリのイチ【詳細は未詳】となりました。

<sup>34-21</sup> 12年(アスス632年)のヤヨイ(3月)の11日に、ミマキイリヒコ(崇神天皇)はミコトノリを出されました。

『アマツヒツギを私が受け継ぎました。しかし、アメのオノレ【詳細は未詳】も安からずでした。メ(冷たいナミ)と、ヲ(温かいナミ)の巡る強さも不調を生じたのでした。このため、ロヤミ(疫病)の流行になり、タミ(国民)の多くが「く」なってしまうたのでした。

この原因は、シミにあって、これを払う事に必要であると判断するに至りました。そこで、革(あらた)めてカミを敬(うやま)うって、ヲシエ(教え)をタシ(教え育み治める、タスを為す)たのでした。それで、ヨモ(四方)のヤモ(ヤモヨロ・800万・全国民)のアラヒトも、今に直って楽しみ生きるようになった。

そこで、わらひ、考えるところなのです。オサ(年長者)とイナケ(若年者)とのミチも明けるようにしたいものです。ツサシ、タミに倉庫してもおらうとする諸税を一部免除して、イトマ(暇・余裕)を作り出し、教育の時間に当たらないと思ひます。

このため、コハツ・タシエ(田舎の上納税・タシエの税)のミツギを止める事にします。タミを賑わすのです』

こうして、ソロの時(収穫時か?)に、社会の雰囲気も温かくなっているたのでした。この御世を、誉め称(ただ)えてハツクニシラス・ミマキのヨと呼ぶようになった。

こうして、タミも楽しみ居ますと、キミのミマキイリヒコもお心安らかできて、キサキも和やかになるのでした。

スケ・キサキのヤサカイリヒメは、トイチ(田原本町)に詣でてメミロ(皇女)のトチニイリヒメを産みました。

<sup>34-25</sup> 26年(アスス646年)ネツキ(11月)のハツヒ(1日)に、ウチミヤ(正皇后)のミマキヒメが、シギ(桜井市)にてトヨキヒコ(シギヒコ)をお産みになりました。

<sup>34-26</sup> 29年(アスス649年)正月元日のラウトのロロのミマキヒメはミロ(皇子)をお産みになります。イクメイリヒコ(イムナ)実名(は、井ノサチさ)でした。

<sup>34-27</sup> 38年(アスス658年)アキ(秋)のハツキ(8月)5日に、ミマキヒメの妹の

クニカタヒメがウチメの位で、チチツクワヒメを産みました。

<sup>34・28</sup> また、400年(アスス660年)のムツキ(1月)スアヤカ(28日)には、イカツルさん(チヨギネ)をお産みになりました。

<sup>34・28</sup> 408年のハツ(1月)の10日のラアハ(ア・ヤ)に、夢見のミコトノリを出されました。トヨキミ(トヨキイリヒコ)23歳)と、イクメキミ(20歳)のお二人に、おっしやいます。

『ナンチ(汝)ら、メクミ(愛しみ)等しくて、継ぎを知る(次代の継承)ことのユメ(夢)をすべし』

二人は共に、「アハミ(湯気でのミンギか?)をこつて、夢見の結果を申し上げます。

兄の、トヨキミ(トヨキイリヒコ)は、

『ミチロ(三輪山)のト(山頂)にて、キ(東)に向きて8度ホコをケシ【差し上げた、か?】』

弟の、イクメキミは、

『ミモロのトにて、ヨモ(四方)に縄張り、ススメ(雀)オフ(追う)』

と、それぞれのユメ(夢)の結果でした。ミマキイリヒコ(崇神天皇)さんは、このユメをお考えになられるのでした。そして、仰っています。

『アヒ(兄)のユメは、ただ東に向いてのじつであった。それで、ホツマ(関東地方)を治めよ。

オト(弟)は、ヨモ(四方)にタミをヲサムル(教え諭して導き修む)ヨツギである』  
そこで、ウ(4月)のソコカ(19日)のシニヒ(日)のロ、ミコトノリを発させられました。

『オソサチ(弟のイクメキミ)を、ヨツギに立てることを宣言します。

また、兄のトヨキイリヒコはホツマ(関東地方)のツカサと為します』

### ミマナのアカ

<sup>34・32</sup>

ミツカキ(ミマキのキミ、崇神天皇)の508年(アスス678年)のハツキ(8月)に、ケオオカミ(氣比神宮・敦賀市)に詣で「ミユキ(御幸)なさいました。ここで祭典をしているときに、ツノが一つある人が、タタヨエリ(漂う、徒に寄って来、か?)でした。ところが、コトハ(言葉)は聞いても理解できませんでした。そこで、ハラ(富士山南麓)のミヤのトミのソロリ・ヨシタケ(徐福の子孫、ホ39・67「ソロリには」は異国の言葉に詳しい)ので、問わしめたのでした。すると、ツノがひとつある人が答えます。(我が国の言葉には、そう聞こえる訳です)

『わたしは、カラクニのキミのミコであります。ツノガアラシトと言います。父の名はウシキアラシトと言います。

尊いお方だと伝え聞きましたでシシのキミ、ミマミラフとと決めて尋ね来たりしましたのです。

初めに、アナト(下関のあたり)に至りましたら、オツシヒコが言いました。「このクニのキミはわれなり。ここに居れば良い」と。ですが、その人なりを見ますると、「どうもきちつとしたキミとは違うようです。

そこで、其処を辞しまして、「ミヤコへと道を取りました。ウラシマを転々と尋ね歩いて、イツモ(出雲)を入れて、漸くここに辿り着きました。カミ祭りのため、キミはケオにおいて

であると聞きましたからでござい」

「ウシ、ツノガ(ツノガアラシト)を、仕えさせる事にならなりました。」

<sup>34・38</sup>5年の仕えのうちに、「マメ(忠節)が認められました。(34・38)そして、「ミマナ」と言いつクニの新名称をツヌガアラシトに賜るのでした。「ミマキイリヒ」(崇神天皇)さんのお名前からの命名です。韓半島の南岸の中央部の「カラ」は「ミマナ(任那)」「と称します。また、帰国にあたって、土産物を賜るツノガアラシトでした。カソミネ・ニシキ(北海道の錦の織物)を土産物に、ミマナクニ(元はカラクニ)に帰って、「ウシ」にクニとクニとの行き来が結ばれたのでした。

さて、帰国の途に就いたツノガアラシトは、海を渡り韓半島に戻ります。シラギのクニからの陸伝いにミマナ(カラ)への道でした。アメウシ【牛の一種、詳細は未詳】に荷物を乗せての行程でしたが、ある時ウシがいなくなってしまうました。そこで、「ウシ、ウシナ(老父)が居て、答えます。」

『ウシの事なら、大体想像されます。この先にて、既に御馳走にと食ってしまう集まりがあるようにでした。』

若(も)しも、ウシの持ち主が来たらば、アタヒ(対価)を払おう。と、言っていたよう  
でして、もうウシは殺してしまっていますですね。

これは、お勧めですが、この先でアタヒを問われたならば、「祭るカミを、得ん」と、お  
答えになるのが宜しいでござい」

ツノガアラシトがその村に行きますと、ムラキミがウシ(牛)のアタヒを問うのでした。  
ツノガアラシトは、「祭るカミを得ん」と言いつ、差し出された、カミのシライシを持ち帰  
るのでした。

さて、枕元に置いておくと、シライシはオトメに変化するのでした。ツヌガアラシトは  
オトメにトツガンとして思い行くうちに、「ヒメは失せてしまいました。さらに、家に戻っ  
てツマに問いますと、「オトメはキサ(東南)に去りました」と言いつのです。

ツノガアラシトは、オトメの行く跡を訪ねて追いかけて、フネを海に浮かべまして、  
また日本に來ます。ついに、ナミハ(大阪)のヒメコソのミヤ(大阪市東成区東小橋、比売  
許曾神社)にて、会うことが出来ました。しかしオトメは、また、ここから出て行きまし  
て、トヨクニのヒメコソのミヤ(豊前、大分県東国東郡姫島村、比売許曾神社)にてカミに  
なってしまうました。(姫島は、良質の黒曜石のとれる所です。象徴的な記述がここに為さ  
れているのかも知れません)

結局、ツヌガアラシトは土産物を奪われてしまったのでした。この故に、シラギとミマ  
ナ(カラ)との間にアタ(アタ、仇敵関係)が生じるのでした。このため、ミマナからの使  
いがまだ、ミマキイリヒさんの許に來ります。ミマナの使いは言います。

<sup>34・45</sup>『我が国のキネ(東北)に、ミハエという土地があります。カミハエ・ナカハエ・  
シモハエのミハエは、広い土地で肥えた土でタミも豊かです。ところが、隣国のシラギと  
の抗争が起つてから、ミハエは治め難くなってしまうました。ホコをタツネテ【詳細は  
未詳】タミ活きず、の、有様です。』

そこで、私ミマナのトミとしての願いで御座います。クニムケのラシ(勅任の平定軍)の  
派遣を希(こいねが)うばかりで御座います。』

ミマキイリヒさんは、諸臣と対応を協議なさいます。トミは申し上げます。

『派遣する人の人選につきまして、クニフク(ヒコクニフク)のマコ(子孫)のシホノリ  
ツさんが最も良いと思われます。(5代カエシネ(孝昭天皇)の長男のカスガラキミ)オシ

キネの子孫)

シホノリツは、コウハ(頭)にミロフ(瘤)があつてマツのキミとも渾名(あだな)されていまして、背丈がヒタケヰタ(1丈5尺)あります。カも強くてヤンチカラ(80人力)だと言われて、イサミも激しいので、派遣に最適でありましょ『

ミマキイリヒコさん(崇神天皇)はミロトノリをしておっしゃいます。

『シホノリヒコ(シホノリツ)をして、ミマナ・ヲツに任せます。』

ミマナに行き、速やかに平定を為すミチツカサとしての任です。平定後は、帰国するに良し』

と、シホノリヒコにカハネ(姓)を賜うのでした。(ワニのカハネか? ホ36-33。後の子孫の吉田連(きちだのむらじ)は、『続日本紀』『続日本後記』『新撰姓氏録』に典拠あり)

3449 ミマキ(ミツカキのミヤ)の600年(アスス680年)のフツキ(7月)14日  
に、ミロトノリが出されます。

『昔、タケヒテルが献上してきたタマカワのカンタカラフ(ホ32-26)を、再び見たいと思うのです。今、イツモ(出雲)に納めてあるのですね』

ホ 32- 28	カ ン タ カ ラ イ ツ モ ニ オ サ ム	イ ツ モ ニ オ サ ム	イ ツ モ ニ オ サ ム
ホ 32- 27	タ テ マ ツ ル コ レ ア メ ミ マ コ	タ テ マ ツ ル コ レ ア メ ミ マ コ	タ テ マ ツ ル コ レ ア メ ミ マ コ
ホ 32- 26	オ シ ウ ト ニ イ ツ マ サ マ ミ コ	オ シ ウ ト ニ イ ツ マ サ マ ミ コ	オ シ ウ ト ニ イ ツ マ サ マ ミ コ

(7代・フツニのキミ・考靈天皇)

タケモロヌミを使者に、イツモ(出雲)に遣わしました。イツモ(出雲)の当主のカヌシのフリネはツクシ(九州)に、たまたま出かけて行っていて留守でした。

フリネの弟のヱイリネは、ミヤからタマカワのカンタカラフミを出して来て、タケモロヌミに渡しました。そして、弟のウマシカラフサと、子のウカツクヌを、お供に添えて、マキイリヒコさんへ捧げるのでした。

<sup>34・51</sup> さて、ツクシ(九州)から帰って来た当主のフリネは、弟ヱイリネの対応を責めます。カンタカラフを捧げるべきでなかったと言いつわけです。

『わたしは帰るまでだったの幾日も待たないで、何故？ タカラフを渡してしまったのだ。恐れての事か？』

我が国イツモ(出雲)は、ヤモロフミ(数多への文献)を隠し置くからこそ尊いのだ。これが故の、未来の栄えの元であることが解らないのか！

どうして、容易(たやす)く出してきましたのだ！』

と、恨みを抱くのでした。弟ヱイリネを忍び殺しにしてしまふ、強烈な恨みでした。

<sup>34・53</sup> フリネは、欺(あざむ)いての図(こ)の事で、弟ヱイリネを花見に誘います。

『ヤミヤのタマモ(出雲市の塩冶(現、大津町)に池が水沢があって、水草の花が綺麗だったと推測されます。阿須利神社・出雲市大津町龍王山に伝承あり)が、花盛りで良い見頃だと聞いたので、一緒に行き見て見たいものだが、どうだろうか』

誘うフリネでした。弟のヱイリネは疑いもなく頷(うなず)いて、兄のフリネと共に出かけたのでした。

フリネは、キタチ(木刀)を抜き置いて水浴びをします。そして、ヱイリネを誘いました。ヱイリネはツルギを抜き置いて水浴びに入りました。

さて、兄のフリネは、先に水から上がると弟のヱイリネのツルギをハク(佩く、付けます)のでした。ヱイリネは驚いて水から上がって、フリネのキタチ(木刀)をハキ(佩き)ます。フリネがツルギを抜いて斬りかかって来ますと、ヱイリネも防戦のため刀を抜こうとしますが、哀れキタチは抜けません。

ヱイリネは、ヤミヤミフチ(ヤムヤの地の淵)に、兄に斬り殺されてしまいました。

<sup>34・56</sup> 世に、流行の歌が広まります。

やくもたつ いつもたけるが

はけるたち つつらさわまき

あわれさひなし

ヱイリネの弟のカラヒサ(ウマシカラヒサ)はオイ(甥)のウカツクヌを連れて、ミヤコに上(のぼ)ります。ミマキイリヒコ(崇神天皇)に、兄のフリネが、弟のヱイリネを謀殺した殺人事件を告げました。

そこで、ミマキイリヒコ(崇神天皇)さんは、ミコトノリして、キヒヒコ(キヒツヒコ)と、タケヌワケ(アハ・タケヌガワケ)に、フリネを討たせます。イツモ(出雲)の当主のフリネが討たれての恐懼(きょうう)に、イツモ(出雲)では先祖のカミ祭りもし得ない状態になりました。

ある日の事でした、ヒカトへ【詳細は未詳】が、近々に詠んだ我が子のウタを、ワカミヤ(東宮・皇太子)のイクメのキミ(32歳)のちの垂仁天皇)に申し上げるのでした。

たまもしつ いつもまつらは  
 まくさまし かよみおしふり  
 ねみかがみ みそこたからの  
 みからぬし たにみくくりみ  
 たましつか うましみかみは  
 みからぬしやも

ウタのアヤ(織り為された意味)は、カミの告げであるかも知れないと、ミマキイリヒコのキミ(崇神天皇)に告げます。ミマキイリヒコさんは、ミトノリして「イツモ(出雲)の祭りをするべし」とおっしゃいますのでした。(大阪府富田林市宮町に、美具久留御魂神社があります。『延喜式』にも記載されています)

<sup>34・61</sup> 602年(アスス602年)のキナト(22)の、アノミツキ(アキ(秋)、7月)のキミト(52)の1日の、ツヤア(53)のシマノ日(ミトノリ)を出されました。

『タミワサはモト(基礎)であります。タノムのことです。タのラシテに拠って、成り固まり、生じてゆくところ。トのラシテの成立の根底です。』このことから、農業用水の不足は重大な問題と言えます。カウチ(河内)のサヤマ(狭山)地方は農業用水の不足が足りない事が、タミワサの不都合の原因です。そこで、ナリワヒの為に用水池を作ることになります。ヨサミ、カリサカ、カエオリのみつつの池を掘らんとします『

ミマキイリヒコ(崇神天皇)さんはクワマのミヤ【詳細は未詳】にミユキ(御幸)になります。

<sup>34・63</sup> 605年(アスス605年)のフツキ(7月)に、ミマナのクニから、ミツギ(上納)の使者が来ます。ミマナの使いはソナカシチと言う人物でした。

ソナカシチの、ミマナのクニからの道のりは遠いものでした。ツクシ(九州)より、北へフチノリの海を隔てています。シラギのツサ(西南)にあります。

<sup>34・64</sup> 608年(アスス608年)のシハス(12月)の1日がラナエ(45)で、5日のネアエ(49)の日のことでした。キミ(10代崇神天皇)はコトキレテ(息が無くなつて)、もの言わず、じなりました。まさに、居寝ますの如き安らかなお亡くなりでした。

翌年のネヤエの69年(アスス609年)のハツ(1月)2日に、ミカト(崇神天皇)のカミアカリ(上がり、崩御)を公けにしました。キミ(皇太子、イクメイリヒコ)や、ウチトミ(近習の臣)はモ(喪)のハ(衣服)を着て喪の謹みに入ります。トのトミが代わってマツリコトを代行します。カンナ(10月)の11日に、オモムロ(遺体)をやマへ(天理市柳本町、山辺道勾岡上陵)にお送りしてお納めするのです。

ミマキイリヒコのキミ(10代、崇神天皇、ミツカキのヨ)のご事績は、カミをアカメテ(崇めて)エヤミ(疾病)をタシ(直し癒し)、ミクサタカラ(三種の神器)を新たに作り直したことに、大きな功績があらわれましたのでした。

『日本書紀』小学館、日本古典文学全集、注

「『和名抄』に「河内国丹比郡依羅、与佐美よき」、「撰津国住吉郡大依羅、於保与佐美よき」がある。大阪市住吉区庭井町に「依羅池址」の碑がある。記に「是の御世に、依羅池を作り、亦輕の酒折さか池を作りき」。↓注。依羅池は狭山池より北流する西除せじ川の西方を北流する河水を、北側に築堤し貯水して造ったと考えられる。かつては広大な池であったが、宝永年間(1704〜1713)に付け替えられた大和川が依羅池を横断したため縮小し、現在ではほとんど消滅している。ニカリサカかカルサカか未詳。『記伝』は「輕坂」とする。ニ記は「輕之酒折池」とある。「輕」は奈良県橿原市大輕町付近。その地域の池である。応神紀十一年十月条に「輕池」の名もある。四未詳。『通釈』に